

## 自著を語る：*The Resurgence of “Buddhist Government”: Tibetan-Mongolian Relations in the Modern World*

石濱 裕美子

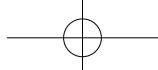
### 1. 共同研究の始まり

1913年、ダライラマ13世は中国との絶縁を宣言し、続いてチベット・モンゴル条約を締結して互いの独立を承認しあった。2013年はこの年から100年目にあたるため、これを記念して国際チベット学会はウランバートルのモンゴル国立大学において開催された。学会の書籍販売コーナーには、モンゴル開催を反映して、ダライラマ13世のモンゴル滞在中の清朝の公文書をまとめた *Dalai Lama on the Run*<sup>(1)</sup> や、ボグド・ハーン政権成立100周年を記念して2011年に前後にモンゴルで多数出版された記念論集類が並び、チベット・モンゴル関係を研究対象とする筆者はそれらを喜んで買い求めた。

国際チベット学会は中日にあたる水曜日をエクスカーションの日に設定している。2013年の場合は7月24日の午後、各自自由にウランバートル市内の博物館や宮殿を見学することになっていた。筆者は在学中モンゴルゼミに属していたが、チベットに軸足を置いていたため、ウランバートルにいくのはこれが初めてであった。そのため、同じく初ウランバートルの小林亮介氏（チベット近代史：九州大学）とともに、ボグド・ハーン政権の研究者である橘誠氏（下関市立大学）の案内で、ジェブツンダンパ8世関連史蹟をまわることとなった。

橘氏の説明をうけつつ冬の宮殿などのジェブツンダンパ8世関連の遺物をめぐるうちに、ボグド・ハーン政権の宮廷文化は清朝宮廷とダライラマ宮廷が習合したもの、とくにダライラマの影響力が強いことに気づかされた。筆者は『チベット仏教世界の歴史的研究』（東方書店、2001年）においてダライラマ政権最盛期の17世紀から18世紀にかけて、満洲・モンゴルの王公は「仏教に基づく政治」（政教一致 *chos srid* > *törü šasin*）を理想に掲げて行動し、ダライラマから権威を付与されることを競い合っていたこと、続く『清朝とチベット仏教』（早稲田大学出版部、2011年）においては、清皇帝も仏教の守護者として振る舞い、モンゴル地域での戦いに勝利するたびにチベット仏教の僧院を建て、自らの軍事行動が領土拡大などの個人的な欲に基づくものではなく、争いを鎮めチベット仏教を興隆することにあることを示した。とりわけ乾隆帝は、チベット僧の衣をまとった自らの肖像画を颁布し、チベット僧から灌頂を授かり、元朝のフビライとパクパの故事を意識した王権儀礼を行なっていたことなどを指摘した。

従って、20世紀のボグド・ハーン政権においてもチベットの政治的、文化的な影響力が健在であったことを知ると、途端にチベット仏教世界の近代に対して興味がわ



いてきた。

散策の後に入ったミッシェル・ホテルのカフェで、筆者は「清朝やロシア帝国の支配によって分断されたチベット仏教世界は20世紀初頭にダライラマ13世がモンゴルに滞在したことなどを契機にリバイバルしていた可能性が高い。近代チベットについて研究する場合はモンゴルの歴史を知っておいた方が良いし、ボグド・ハーンを研究する場合も、先行する政教一致政権であるチベットのダライラマ政権を視野にいれた方がいい。三人で共同研究をしたらきっと今までに無い成果がだせる」と小林、橋両氏を説得し、翌年科研費（基盤C）を取得した。

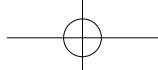
## 2. 共同研究の推移

それから3年間、近代史がまったく素人であった筆者は、2人の優秀な若手研究者から情報を獲つつ、近代チベット・モンゴル関係の論文を書くという幸福な環境に身をおくことができた。以下、本書に収録された筆者の論文についてまず述べ、4節の「本書の構成」に基づき著者たちの研究内容について紹介していきたい。

イギリス軍を避けチベットを脱したダライラマ13世は1904年暮れにモンゴルのイフ・フレー（現ウランバートル）に到着した。すると、内・外モンゴルのみならずロシア領のブリヤートからも多数の巡礼がおしよせ、清朝やロシアによって分断されていたモンゴル人に一体感が醸成された。一方、ダライラマに人気とお布施を奪われたジェブツンダンパ8世は、ダライラマ13世と対立した。チベット仏教界のヒエラルキーの頂点にいるダライラマ13世側は、ジェブツンダンパ8世より高い座につくことを当然としたのに対し、ジェブツンダンパ8世は自らの支持層であるハルハの人々の手前、ダライラマ13世と同じ高さの座につくことに固執した（結果、両者は公の場で会見しなかった）。また、ダライラマ13世は戒律厳守を呼びかけていたにもかかわらず<sup>(2)</sup>、ジェブツンダンパ8世が後に王妃として即位するトンドウプラモを公然とつれあるき、深酒をしていたため、ダライラマ13世はこの破戒を理由に清朝に対してジェブツンダンパ8世を告発していた（第1章）。

次にダライラマ13世の自称称号の変遷について検討した。毎年正月にダライラマ13世が護法尊ペルテンラモに捧げていた祝詞や聖勅のコロフォンから自称称号を抽出すると、即位の当初は清皇帝由来の称号を名乗っていたものの、1904年、清皇帝がその称号を剥奪し、1908年に屈辱的な称号を受けられた後は清皇帝由来の称号を採用せず、1909年にラサに帰国するやインドの仏を権威の源泉とする称号を名乗り、その称号を刻んだ印章からは満洲語・漢語が消え、チベット文字・モンゴル文字・ランツァ文字で記したことなどが分かった。また、1913年以前、前述したペルテンラモ尊に捧げる祝詞の中で、ダライラマ13世はチベット政府と清の繁栄を対句で言祝いでいたが、1913年以後は清皇帝に対する長寿祈願は姿を消し、チベット政府の繁栄のみが祈られるようになった。これはチベットの清朝との絶縁は1913年より四年古く、ボグド・ハーン政権に先行するものであることを示している（第4章）。

1911年、ハルハの王公が独立を宣言し、ジェブツンダンパ8世を国王に推戴した。



この即位式を先行するダライラマ 13 世の即位式と比較すると、予想通り両者には多数の類似点があった。一方、ジェブツンダンパ 8 世は独身であることが求められる僧侶であったにもかかわらず妃を即位させたため、その整合性をつけるため妃を密教の女性パートナーとして演出するという相違点もあった。つまり、1911 年のボグド・ハーン政権の成立は、1904 年から 1906 年のダライラマ 13 世のモンゴル滞在、また 1909 年のダライラマ 13 世の清朝との断絶などと関連させて考察すべきものであることを示した（第 5 章）。

民主化後のモンゴル史学界においては、人民革命にかわってボグド・ハーン政権の成立を高く評価する傾向があるため、ジェブツンダンパ 8 世にとって不名誉な出来事は人気がない研究テーマである。思えばモンゴルに軸足をおいていない筆者であるからこそ、このテーマを気軽に扱うことができたのだと思う。

小林氏が大英図書館においてみいだしたクルルク貝子からダライラマ 13 世へのモンゴル語の書簡を橋氏が読解し、橋氏がウランバートルのアルヒーブで見いだしたチベット語のチベット・モンゴル条約に関連した文書を小林氏が解読するなど（両資料とも本書の Appendix に収録されている）、この共同研究は非常にうまくまわっていたと思う。そこで、科研費が最終年に入った頃、研究成果を英文で出版することを提案すると両氏は快く承諾してくれた。さらに研究を進めていくうちに、ロシアのチベット仏教徒（カルムック人、ブリヤート人）が近代チベット仏教世界の重要な構成要素であることが判明してきたため、カルムック仏教の研究者である井上岳彦氏（大阪教育大学）に 4 人目の共著者として加わって戴くことになった。

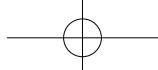
### 3. 本書の執筆方針

皆で話合っているうちに固まった本書の執筆方針をここで述べたい。

従来の近代チベット、モンゴル史研究の多くは、大国間の国際関係、あるいは大国とチベット・モンゴルとの二国間関係といった大国の動向を重視した視点からなされており、チベット政府やダライラマ 13 世、あるいはモンゴル王公やジェブツンダンパ 8 世等当事者の視点から行った研究は非常に少ない。

また、当事者視点が欠落していることの延長として、近代におけるチベット仏教徒間の相互関係について扱う研究も低調である。チベット、モンゴル、青海、ロシアの仏教徒たちは、チベット仏教を紐帶として共通の精神性を有し、商業・聖地巡礼・僧侶の留学などにより人的交流も盛んであった。にもかかわらず、これらの領域をこえた相互作用には従来ほとんど目が向けられることはなかった。チベットとモンゴルの関係に限っても、たとえば、ダライラマ 13 世が 1904 年から 1909 年にかけてハルハ・モンゴルや青海モンゴルに滞在したことが、その後におきる 1911 年のモンゴル独立に際してモンゴル王公やジェブツンダンパ 8 世の行動にどのように影響したかという基本的な問題についても Batbayar 氏<sup>(3)</sup> の評論的な研究があるのみで、資料を用いた研究はなされていない。

このように研究内容に偏りが生じるについては、両地域に現在進行形で高揚してい



るナショナリズムに原因が求められる。たとえば、モンゴルにおいては、1990年の民主化達成以後、長らく続いてきた清朝とソ連の抑圧から解放された反動から、ナショナリズムが高揚し、モンゴル独自の文化（帝国史、遊牧、英雄叙事詩、シャーマニズムなど）に関する研究が盛んに行われる一方、モンゴル以外の地域がモンゴルに及ぼした影響は低調である。

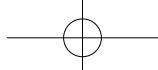
また、研究者も現在「国家」として存在する「モンゴル」のナショナルヒストリーに自ずと縛られるため、現在モンゴル国の域外に住むチベット人、ロシア治下のカルムック人、ブリヤート人、中国国内に存在する南モンゴル人たちを含めてモンゴル史を論じることはない。結果、地域史（モンゴル史、チベット史、カルムック史、ブリヤート史）が積み上げられていくばかりで、これらの地域を包括的に論じる歴史像はいまだ現れていない。

分裂したモンゴル系の諸集団を包括的に捉えるためには、これらの集団を結びつけていたチベット仏教が鍵となる概念であることは明白であるが、チベットは現在のモンゴル人にとって「域外」であり、かつ、社会主義政権時代に宗教が否定され、僧院が破壊され多くの文献をとその文献を読解できる人材を失ったこともあり、チベット仏教を紐帶としたチベット仏教世界の近代について、その研究が十分に行われているとはいえない。

近代チベット史研究についてもナショナリズムの問題からは自由であるとは言えない。現在チベット人の居住域の大半は中国の統治下にあり、チベット人が自律的に自らの文化を維持するコミュニティーは難民社会、あるいはインドやネパールの辺縁にかろうじて存続しているにすぎない。このため、政治的に中国とは別個体であった過去のチベットは、将来めざすべき理想の姿ととらえられやすく、多くの人は過去のチベットに「近代国家としてのチベット」の萌芽を見いだそうとする。しかし、国民国家、民族、領土・国境といった概念は近現代に入ってからアジアにもちこまれたものであり、この概念を用いてチベット・モンゴル史を語ることが許されるのは、チベット・モンゴルの為政者がこれらの概念を理解した時期を確認した後のことであろう。しかし、多くの論者はこのような手順を踏むことなく現代の概念を安易に過去にもちこんで同時代を解釈しようとする。

本書では以上のような先行研究の問題点を踏まえつつ、以下三つの方針に留意しつつ執筆することとなった。

- (1) 大国からの視点ではなく、ダライラマ13世、ジェブツンダンパ8世など当事者の視点に留意する。
- (2) 現在の国家領域に囚われず、領域をこえて移動するチベット仏教徒の人的・物的交流とその相互作用に注目する。
- (3) 近代に入って西洋から持ち込まれた概念を無批判に過去に持ち込んで歴史的事件を評価・解釈するのではなく、同時代資料を用いて同時代の文脈の中で解釈する。



#### 4. 本書の構成

本書の第1・4章・5章を石濱が、第2・6章は小林亮介が、第3章は井上岳彦が、第7・8・9章は橋誠が担当した。以下が目次の和訳である。

##### 『仏教徒政権の復活：近代におけるチベット仏教世界』

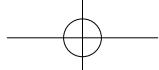
- 第1章 ダライラマとジェブツンダンパの間に生じた亀裂：普遍教会と地方教会の衝突
- 第2章 ダライラマ13世（1904-1912）の亡命と外交：チベットとアメリカ・日本との邂逅
- 第3章 チベット仏教世界の交流の再開：19世紀後半から20世紀全般のカルムック巡礼
- 第4章 [ダライラマ13世] 清皇帝と決別し新しい称号を名乗る
- 第5章 ダライラマの即位式に倣ったジェブツンダンパの即位式
- 第6章 1913年のルンシャル使節とイギリス：ダライラマ13世の書簡に着目して
- 第7章 1913年のモンゴル・チベット条約の再検討：その同時代的意義
- 第8章 モンゴルのチベット人：20世紀初頭のモンゴル・チベット関係
- 第9章 モンゴル、チベットの間で：20世紀初頭の青海モンゴル

第1章は比較的詳細に述べたので、第2章以後の内容について、時代背景とともに各章の概要を紹介していきたい。

1906年、ダライラマ13世は新たな道を模索してイフ・フレー（現ウランバートル）を離れ青海に向かい、さらに1908年には五台山をへて北京へと向かったが、この間自律的に各国の大使・民間人と交流し、自らの外交観をひろげていった。1906年に、青海のクンブム大僧院、五台山、北京において東本願寺の僧侶であり民間工作員である寺本婉雅と接触して日本についての知見をえて一時期は日本訪問も考え、また、アメリカの外交官でありチベット学者であるロックヒルとの接触を通じてアメリカについての知見を得て、ロックヒルのすすめに従い、反英感情をやわらげた。これは後にダライラマ13世がイギリス領インドへ亡命する下地となる（第2章）。

1908年にダライラマ13世と五台山で接触した外国人の中には中央アジアを西から東に横断したロシアの将校マンネルヘイムもいた。マンネルヘイムはその旅の中で、新疆トルグートを訪れ、彼らがヴォルガ河畔のトルグート（カルムック）と交流を持ちたがっていたこと、また、ロシア臣民であるトルグートやブリヤート人たちがラサやアムドや五台山の僧院に留学していたことを伝聞の形で記録している<sup>(4)</sup>。

このロシアのチベット仏教徒たちについては第3章において扱われる。始まりは、ドン河流域に住む4人のカルムック人が1877年にチベット巡礼に旅立ち、このうち2人がイフ・フレーに到達したことである。1891年にはバーザ=バクシ=メンケジュエフ（Baaza-bagshi Menkedzhuev）がラサ到達に成功し、彼の帰還がカルムック人たちにチベット巡礼熱を呼び覚ました。そして、このバーザ=バクシが、ラサで知り合つ



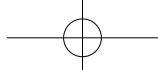
たダライラマ13世の側近ブリヤート人ドルジエフをカルムックに迎えた結果、カルムック人とチベット仏教界と直接交流の道が開かれ、カルムックやペテルスブルグにおけるチベット式僧院の建設へつながっていく（第3章）。

1907年、イギリスとロシアの間では清朝をチベットの宗主国とする英露協商が締結され、ロシアの支援が期待できなくなり、さらに、四川軍の東チベットへの侵略もとまらない中、1908年に清廷からダライラマ13世に新たな称号が授けられた。この称号からはダライラマ13世を「天下の仏教の主宰者」とする表現が消えていたため、ダライラマ13世は1909年、5年ぶりにラサに帰還すると、ダライラマ5世が順治帝より授かった称号を捨て、仏を権威の源泉とする新たな称号を名乗り、そのままイギリス領ダージリンへと亡命した。つまりダライラマ13世はモンゴルの独立に先んじること2年前に、すでに清朝との絶縁を宣言していたのである（第4章）。

1911年辛亥革命の発生を受け、その12月にはジェブツンダンパ8世とその妻トンドゥプラモは王と王妃として即位し、モンゴルの独立を宣言した。その際に示されたジェブツンダンパ8世の王権像は、ダライラマ13世の尊称と清皇帝の尊称を加えた「妻帯する菩薩王」であり、妻のトンドゥプラモにもダーキニー、国母といった尊称が捧げられ、彼らの結婚は破戒ではなく聖婚と主張された。こうして誕生したジェブツンダンパ8世の政権は既存のダライラマ政権と同じく政教一致であった。つまり、国家儀礼や王権像から見た場合、ジェブツンダンパ8世の王権像は近代国家の専制君主ではなく伝統的なチベット仏教世界の菩薩王の姿であった。チベットとモンゴルが立て続けに中国抜きの政教一致の政権の樹立を宣言したことは、菩薩王として機能しなくなった清皇帝・中華民国の総統にとってかわる意志を表明したとも解釈することができる（第5章）。

1913年、ラサから清朝軍が退避したことを受けてダライラマ13世は英領インドよりラサに帰還し、自立の布告を発布し、さらに、イギリス、ロシア、アメリカ、日本の為政者に宛てた親書を送った。この親書において、ダライラマ13世は英露協商によって定められたチベットの政治的な地位を変えようと、一貫してチベットの「自治」rang btsanを主張している。とくにチベットにとって重要なイギリスにはチベット人の4人の留学生が送られ、エスコートをしたルンシャルにはイギリスの国王、王妃、大臣らへあてたダライラマ13世の親書が託された。このチベット語書簡は同時期英領インド官僚によって英訳されたが、現在「独立」と翻訳されるrang btsanには独立independenceという訳語は用いられていない。ただし、ここで重要なのは、ダライラマ13世がrang btsanという言葉を強調しつつ、チベットが歴史的に中国(rgya nag)とは別個の政治体であったこと、将来もまた中国からの干渉を受けないものであると主張していたことである（第6章）。

また、ダライラマ13世の親書の送り先に英露協商に縛られない日本、アメリカなどの新興国が入っていることも注目すべき点である。当時、チベットにおいてはチベットの国際的な地位を保全するためハーグ国際法廷に訴えようという一派がいたことから考えても<sup>(5)</sup>、これらの書簡は中国に対する包囲網を構想していた可能性をも示唆

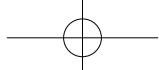


している。

「自立の布告」をだす直前の1月11日、ダライラマ13世とジェブツンダンパ8世からそれぞれ権限を与えられた代表者がイフ・フレーにおいてモンゴル・チベット条約を締結し、その冒頭の二条においてチベットのダライラマ13世とモンゴルのジェブツンダンパ8世は互いの独立を承認しあった。この条約は從来、両国の独立を対外的にアピールするために締結されたものとみなされてきたが、前述したようにダライラマ13世は国際的にチベット政府の長と認識されていたため、改めて「独立」を宣言する動機はない。また、モンゴルもモンゴル・ロシア協定によって自治は確保しているため、対外的に自主・自立を宣言する必要もない。しかし、モンゴルの国内状況に目を向けると最初の二条がジェブツンダンパ8世にとってより大きな意味を持つことが理解できる。すでにチベットの政教一致の政権の長であったダライラマ13世とは対照的に、ジェブツンダンパ8世は1911年以前はモンゴルを統治する政治権力を持たなかつた。さらに、ジェブツンダンパ8世の権威は1905年にダライラマ13世に破戒を指摘されることにより著しく傷ついていた。1911年に独立を宣言した後も、政権内では王公と内務大臣をつとめるダラマの間の対立が顕著であった。このため、ダライラマ13世がジェブツンダンパ8世を同格にとらえた冒頭の二条は、ジェブツンダンパ8世にとっては、国内に向けてダライラマ13世との争いが終息したこと示し、かつ自らの権威を高めることのできる有意義なものであった。つまり、本条約の最初の二条は当時ダライラマ13世よりもジェブツンダンパ8世にとって、対外的アピールというよりもモンゴル国内むけて意味のあるものであったと思われるのである（第7章）。

モンゴル・チベット条約の第6条では、チベットの商人が以前のようにモンゴルで貿易を行うことを許可することが定められた。この条約の締結後、モンゴルでは外務省がモンゴル在住のチベット人を管轄することとし、チベット人商人の商行為はロシア人同様非課税と決められた（中国人は課税対象であった）。1921年のキャフタ協定によってハルハ・モンゴルが、1914年のシムラ条約によりチベット本土が中国の宗主権下における自治国家とされると、中華民国はモンゴル在住のチベット人は自治領域外に住むものとして中国の法に従わせようとした。この件をモンゴル外務省が在モンゴル・チベット人に問い合わせたところ、チベット人たちは中国の法ではなく、ジェブツンダンパ8世に管理されることを希望したため、モンゴル政府もモンゴル・チベット条約に基づきチベットを「国家」とみなして、在モンゴル・チベット人の保護を続けた（第8章）。

1911年にボグド・ハーン政権が成立した際、ボグド・ハーンのモンゴルと直接領域を接していない青海の王公ナムタン・チュークルが政権への参加を希望し、イフ・フレーにも出向いていた（第9章）。この青海王公はダライラマ伝の中ではクルク貝子の名前で知られ、1904年のチベット暦の7月末にダライラマ13世がチベットからモンゴルに向かう途中、青海で初めてダライラマ13世と出会い、8月30日にダライラマ13世が旗界をでるまで、その旅路を助けた。ダライラマ13世が1906年から



1909年までの間クンブムに滞在している間にも、ナムタン・チュークルはダライラマの宫廷に顔をだし続けた。ボグド・ハーン政権の呼びかけに、領域を接していない青海モンゴルがいち早く応答し、1913年にはイフ・フレーにまで出向いてジェブツンダンパ8世より爵位を授かった背景には、ダライラマのモンゴル滞在を契機に復活したチベット仏教世界の相互交流があったことを指摘できよう<sup>(6)</sup>。

## 5. 表題と表紙と献辞について

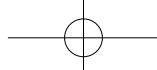
本書の表題を決める際、筆者はアメリカ留学歴のある小林、橋両氏に案を求めたものの、忙しい2人から返事はなく申請書の締め切り日が迫ってきた。そこで、当時ロードショーにかかっていた「インディペンデンスデイ II」の副題リサージェーンス(Resurgence)をキーワードにすることにした。「リサージェーンス」とは一時途絶えていたものが再開することを意味するので、ダライラマ5世によって頂点を迎えたチベット仏教世界がロシアや清朝の支配によっていったん衰退したものの、20世紀初頭、ダライラマ13世のモンゴル巡錫を契機として、再び活気づくことを表現するのに格好な言葉かと思ったからである。しかし、この言葉の語感が妥当であったのか否かは今もって自信がない。

次に表紙に用いた地図について述べたい。本地図はJohn Tallis (1817-1876) の世界地図中のチベット・モンゴル・満洲地図であり、橋氏の提案によるものである。表紙を青くし裏表紙を赤くしたのは、モンゴルカラーの青とチベットカラーのえんじ色を組みあわせることにより、チベット史とモンゴル史をチベット仏教世界として一つの視点から見る本書の内容を象徴したつもりである。

次に献辞“*To Goro*”について述べる。本書の作成中の2017年6月6日、奇しくも筆者の誕生日に、19才になる筆者の愛鳥ごろう（オカメインコ）が急死した。彼は私の人生における最良の天からの贈り物であった。そのことを知つてか知らないでか、ユニオン・プレスさんから「英語の本は形式上、献辞をいれねばなりません」と言わされた時、共著者たちは「ごろうちやんでいいんじゃないですか」と言ってくださり、その御陰でこの献辞が実現した。共著者のお気遣い（?）に心より感謝する。

最後に本書の後日談について述べたい。2019年7月8日にフランス国立東洋言語文化学院（Inalco）で開催された国際チベット学会において、筆者がオーガナイザーとなって本書と同名のパネルを組んだ。パネラーには本書の著者である橋、石濱、井上に加えて、南モンゴル史のハムゴト（下関市立大学、現：広島大学）、ブリヤート史のツェレンピロフ、カルムック史のクチャーノフ、モンゴル近現代史の研究者クズミン、チベット近現代史の和田大知をお迎えした。2013年の国際チベット学会において着想した研究が、6年後の同学会において結実したことは感慨深いものがあった。

本書を読んでくださった研究者の中から、モンゴル史、チベット史、ブリヤート史、カルムック史を近代において再興したチベット仏教世界という視点からとらえる方がでてきてくれることを願つてやまない。



Yumiko Ishihama, Makoto Tachibana, Ryosuke Kobayashi, Takehiko Inoue, *The Resurgence of "Buddhist Government": Tibetan-Mongolian Relations in the Modern World*, Union Press, 2019. xiv + 242p.p.

註

- (1) Sampildondov Chuluun & Uradyn E. Bulag ed. *The Thirteenth Dalai Lama on the run (1904-1906) Archival Documents from Mongolia*. Leiden, Boston : Brill, 2013.
- (2) 石濱裕美子「ダライラマ13世によるモンゴル仏教界の綱紀肅正とその意義について」『桜文論叢』第96号、2018年。
- (3) Tsedenbamba Batbayar, Grand Union between Tibet and Mongolia: Unfulfilled Dream of the 13th Dalai Lama. *The Mongolian Journal of International Affairs*, No.17, 2012.
- (4) 石濱裕美子「マンネルハイムのアジア旅行日記から見るチベット仏教徒の動向について」『内陸アジア史研究』第31号、2016年。
- (5) 石濱裕美子・井上岳彦「ロシア科学アカデミー公文書館所蔵チベット文三書簡の歴史的意義」『内陸アジア史研究』第33号、2018年。
- (6) 石濱裕美子「20世紀初頭、チベットとモンゴルを結んだ二人のモンゴル王公—カンドー親王とクルルク貝子—」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』第29号、2019年。

(いしはま ゆみこ：早稲田大学教育・総合科学学術院)